



613-001560 Rev.G 121226



最初にお読みください

# CentreCOM® ARX640S リリースノート

この度は、CentreCOM ARX640S をお買いあげいただき、誠にありがとうございました。  
このリリースノートは、取扱説明書とコマンドリファレンスの補足や、ご使用前にご理解いただきたい注意点など、お客様に最新の情報をお知らせするものです。  
最初にこのリリースノートをよくお読みになり、本製品を正しくご使用ください。

## 1 ファームウェアバージョン 5.1.0

### 2 本バージョンで追加・拡張された機能

ファームウェアバージョン 5.0.3 から 5.1.0 へのバージョンアップにおいて、以下の機能が追加・拡張されました。


#### 2.1 サポートする USB 型データ通信端末の追加

下記の USB 型データ通信端末をサポートしました。

- ・ イー・モバイル GD01


なお、サポートする USB 型データ通信端末の最新情報は、弊社ホームページでご確認ください。

#### 2.2 USB ポート

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「システム」


- 過電流検出により電源供給が停止された USB ポートを復旧させる clear device usb port コマンドが追加されました。
- USB ポートで過電流を検出したときに、ログメッセージを出力するようにしました。
- 未サポートの USB デバイスを接続したときに、未サポートであることを示すログメッセージを出力するようにしました。

#### 2.3 フィーチャーライセンス関連コマンド

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「システム」

BGP ライセンス AT-FL-20-B のサポートにあたり、フィーチャーライセンスを有効化する license コマンドと、フィーチャーライセンスの情報を表示する show license コマンドが追加されました。

#### 2.4 DNS 問い合わせ機能の IPv6 対応

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「システム」

本製品自身のためのホスト名解決（DNS 問い合わせ）を IPv6 でも行えるようになりました。IPv6 による DNS 問い合わせは初期状態では無効ですが、ipv6 domain lookup コマンドを実行することにより有効化できます。なお、本機能は実際の問い合わせを IPv6 DNS リレー機能（2.23 項を参照）に対して行うため、同機能との併用が必要です。

---

## 2.5 copy コマンドの拡張

 [「コマンドリファレンス」](#) / [「運用・管理」](#) / [「ファイル操作」](#)

copy コマンドの書式を拡張し、ランニングコンフィグを直接 USB メモリー上のファイルに保存できるようにしました。新しく追加された書式は次のとおりです。

```
copy running-config usb <0-1> DSTFILEPATH
```


また、フラッシュメモリー上のファイルやスタートアップコンフィグを USB メモリーにコピーするとき、旧バージョンではコピー先のディレクトリーのみ指定可能で保存ファイル名までは指定できませんでしたが、本バージョンからコピー先のファイル名も指定できるよう拡張しました。拡張された書式は次のとおりです。

```
copy flash SRCFILENAME usb <0-1> [DSTFILEPATH]
```

```
copy startup-config usb <0-1> [DSTFILEPATH]
```

---


## 2.6 SNMP の IPv6 対応ほか

 [「コマンドリファレンス」](#) / [「運用・管理」](#) / [「SNMP」](#)

- SNMP が IPv6 対応になりました。IPv6 上で SNMP を使用するには、snmp-agent ipv6 enable コマンドで IPv6 用の SNMP エージェントを有効化します。コミュニティーや管理ホスト、トラップホストなどの設定コマンドは IPv4/IPv6 共通です。
- OSPF-MIB (RFC4273) をサポートしました。
- BGP4-MIB (RFC1850) をサポートしました。

---

## 2.7 ループバックインターフェース


 [「コマンドリファレンス」](#) / [「インターフェース」](#)

 [「コマンドリファレンス」](#) / [「IP ルーティング」](#) / [「IP インターフェース」](#)

仮想的なインターフェースであるループバックインターフェースをサポートしました。ループバックインターフェース loop 0、loop 1 は初期状態で存在しており（ただし無効化されているため、使用前に「no shutdown」による有効化が必要です）、IP アドレスを設定して、常時有効な IP インターフェースとして経路制御などに使用できます。

---

## 2.8 IP over IP トンネリング


 [「コマンドリファレンス」](#) / [「インターフェース」](#) / [「トンネルインターフェース」](#)

トンネルインターフェースにおいて、下記 4 方式の IP over IP トンネリングをサポートしました。

- ・ IPv4 over IPv4
- ・ IPv4 over IPv6
- ・ IPv6 over IPv4
- ・ IPv6 over IPv6

---


## 2.9 LAN 側スイッチのフォワーディングデータベース表示コマンド

 [「コマンドリファレンス」](#) / [「VLAN」](#) / [「LAN 側設定」](#)

LAN 側スイッチのフォワーディングデータベース（MAC アドレステーブル）を表示する show mac address-table コマンドが追加されました。

---

## 2.10 WAN 側 Ethernet インターフェースでの VLAN タグ付きパケット送受信


 [「コマンドリファレンス」 / 「VLAN」 / 「WAN 側設定」](#)

WAN 側 Ethernet インターフェース (gigabitEthernet 0 ~ 1) 上で IEEE 802.1Q VLAN タグ付きパケットの送受信が可能になりました。これは、WAN 側 Ethernet インターフェース上にサブインターフェースを作成し、VLAN ID を割り当てることによって実現します。VLAN ID を割り当てたサブインターフェースは 802.1Q VLAN インターフェースと呼ばれ、WAN 側 Ethernet インターフェースや PPP インターフェース、LAN 側 VLAN インターフェースと同様のルーティング / ブリッジング用インターフェースとして使用可能です。

なお、WAN 側 Ethernet インターフェース上の VLAN 機能は、LAN 側スイッチ上の VLAN 機能とは独立した機能です。WAN 側と LAN 側に同一 VLAN ID の VLAN を作成しても、両者は異なるブロードキャストドメインに所属するため、レイヤー 2 の直接通信はできません。

---


## 2.11 VLAN タグ付きパケットのブリッジング

 [「コマンドリファレンス」 / 「ブリッジング」](#)

ブリッジ機能において、VLAN インターフェースで受信したタグ付きフレームをタグ付きのまま別のインターフェースに転送する機能が追加されました。本機能と EtherIP トンネルインターフェースを併用することで、タグ付きフレームのリモートブリッジングが可能になります。本機能はブリッジグループ作成時点では無効ですが、bridge dot1q pass-through コマンドで有効化できます。

---

## 2.12 IPv4/IPv6 の ECMP 対応

 [「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」](#)

 [「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」](#)

IPv4/IPv6 のルーティング機能において、同一宛先・同一コストの経路エントリ（イコールコストパス）を複数同時に使用できるようになりました（ECMP 対応）。初期状態では同時に使用可能なイコールコストパスの数は 4 に設定されていますが、maximum-paths コマンドで変更することが可能です（ECMP の設定コマンドは IPv4/IPv6 共通です）。

---

## 2.13 RIP の機能拡張

 [「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「経路制御 \(RIP\)」](#)

経路制御プロトコル OSPF、BGP の新規サポートにともない、既存機能の RIP において OSPF、BGP 経路の再通知が可能になりました。再通知の設定は、redistribute コマンド（RIP モード）に追加された ospf、bgp オプションで行います。また、RIP 経路表をクリアする clear ip rip route コマンドにも ospf、bgp オプションが追加されました。

---

## 2.14 OSPF

 [「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「経路制御 \(OSPF\)」](#)

経路制御プロトコル OSPF（バージョン 2）をサポートしました。

---


## 2.15 BGP


 [「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「経路制御 \(BGP\)」](#)

経路制御プロトコル BGP（バージョン 4）をサポートしました。ご使用にはフィーチャーライセンス AT-FL-20-B が必要です。

---

## 2.16 経路フィルタリング

 「コマンドリファレンス」 / 「IPルーティング」 / 「経路制御 (フィルタリング)」


 「コマンドリファレンス」 / 「ファイアウォール」 / 「IPフィルター」


経路制御プロトコル OSPF、BGP のサポートにともない、次に示す経路フィルタリング用の機能追加・機能拡張が行われました。これらの機能は OSPF、BGP 専用で、RIP ではサポート対象外となります。

- 経路情報のフィルタリングを行うための下記機能が追加されました。
  - ・ IP プレフィックスリスト
  - ・ ルートマップ
- `access-list ip standard(rule entry)` コマンドに `exact-match` オプションが追加されました。`exact-match` オプションは「A.B.C.D/M exact-match」の形式で使用し、経路エントリーのプレフィックス長が「M」の時だけマッチするよう指示するためのものです（`exact-match` オプションを指定しない場合は、経路エントリーのプレフィックス長が「M～32」の時にマッチします）。

---

## 2.17 IPv6 インターネット接続

 「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」

 「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」 / 「NGN」

NTT 東日本 / NTT 西日本の「フレッツ 光ネクスト」(NGN) を利用した IPv6 インターネット接続に対応しました。サポートする接続方式は次のとおりです。

- ・ IPv6 IPoE 接続
- ・ IPv6 PPPoE 接続


いずれの接続方式においても、NTT 閉域網内に設置されている加入者向け「サービス情報サイト (NGN IPv6)」と IPv6 インターネットへの同時アクセスが可能です。設定方法については、別途提供の設定例集をご覧ください。

なお、本バージョンから下記の IPv6 関連機能をサポートしますが、これらは上記 IPv6 インターネット接続環境での使用を想定したものです。他の用途での使用はサポート対象外になりますので、必ず別途提供の設定例にしたがってご使用ください。

- ・ ND プロキシ ( `ipv6 nd proxy` コマンド )
- ・ IPv6 NAT (NPTv6) ( `ipv6 npt auto nd-multicast` コマンドほか )
- ・ NGN 経路自動設定 ( `ipv6 ngn enable` コマンドほか )
- ・ ULA (ユニークローカル IPv6 アドレス) 自動設定機能 ( `ipv6 ngn ula` コマンド )
- ・ RA によるアドレス削除通知機能 ( `ipv6 nd ra-invalidate` コマンド )
- ・ RA 受信インターフェース以外に対するアドレス自動設定 ( `ipv6 address autoconfig` コマンドの `IFNAME` パラメーター )

---

## 2.18 IPv6 インターフェースの機能拡張


 「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」 / 「IPv6 インターフェース」

- 下位のインターフェースがリンクダウンしているときでも、インターフェースに設定された IPv6 アドレスを有効なものとして扱わせるオプションを追加しました。本オプションは初期状態では無効ですが、対象の IPv6 インターフェースで `ipv6 address-up-always` コマンドを実行することにより有効化できます。

- ルーター通知 (RA) の受信によるアドレス自動設定機能において、RA を受信したのとは異なるインターフェースにアドレスを自動設定するオプションが追加されました。本オプションは、`ipv6 address autoconfig` コマンドの `IFNAME` パラメーターにアドレス設定対象のインターフェースを指定することで有効になります。なお、本機能は NTT 東日本 / NTT 西日本のフレッツ 光ネクストを利用した IPv6 接続環境において、ひかり電話契約なしの IPv6 IPoE 接続を行うための機能であり、ND プロキシ ( `ipv6 nd proxy` コマンド ) との併用が必須です。他の用途での使用はサポート対象外になりますので、別途提供の設定例集にしたがって設定してください。

---


## 2.19 DHCPv6 クライアントの機能拡張

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」 / 「DHCPv6 クライアント」

- PPPoE インターフェースでも DHCPv6 クライアント機能を使用できるようになりました。
- ステートレスモード時に、O フラグがセットされたルーター通知 (RA) パケットを受信するまで、IPv6 設定情報を要求せずに待機させるオプションが追加されました。本オプションは初期状態では無効ですが、DHCP クライアントモードで `ra-synchronize` オプションを実行することにより有効化できます。
- ステートフルモード時に、DHCPv6 サーバーのリンクローカルアドレスをデフォルトゲートウェイとして IPv6 経路表に登録させるオプションが追加されました。本オプションは初期状態では無効ですが、DHCPv6 クライアントモードの `default-route-manage` コマンドを実行することにより有効化できます。

---


## 2.20 拡張 IP アクセスリストの機能拡張

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「ファイアウォール」 / 「IP フィルター」

`access-list ip extended(rule entry)` コマンドにおいて、始点・終点 IP アドレスを任意の範囲で指定できるようになりました。IP アドレスを範囲指定するときは、「`address-range 192.168.1.100-192.168.1.199`」の形式でアドレスを指定します。

---


## 2.21 攻撃検出の IPv6 対応

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「ファイアウォール」 / 「攻撃検出」

攻撃検出機能が IPv6 対応になりました。IPv4 と IPv6 では検出可能な攻撃の種類が若干異なりますが、動作や設定方法はほぼ共通です。

---

## 2.22 QoS

 **参照** 「コマンドリファレンス」 / 「QoS」

QoS (Quality of Service) 機能をサポートしました。本製品の QoS 機能では、レイヤー 3 インターフェースで送受信するパケットを最大 10 個のトラフィッククラス (暗黙のシステムトラフィッククラスとデフォルトトラフィッククラスを含む。ユーザーが任意に設定できるトラフィッククラスは 8 個) に分類し、それぞれに異なるサービスレベル (帯域または優先度) を割り当てることができます。トラフィッククラスごとに用意される送信キューの制御方式としては、重み付きラウンドロビン (WRR) で帯域制御を行うクラスベースキュー (CBQ) と、上位キューからの送信を優先する絶対優先キュー (PQ) の 2 種類があり、送信インターフェースごとに方式を選ぶことが可能です。また、送信パケットにマーキングを行う機能や、送信インターフェースの帯域に上限を設定する機能も備えています。

---

## 2.23 DNS リレーのIPv6 対応ほか

 「コマンドリファレンス」 / 「IP 付加機能」 / 「DNS リレー」

- DNS リレー機能がIPv6 対応になりました。IPv6 による DNS 問い合わせを IPv6 DNS サーバーにリレーするには、`proxydns ipv6 enable` コマンドで IPv6 DNS リレー機能を有効化します。リレー先の DNS サーバーは、`proxydns server` コマンド (IPv4/IPv6 共通コマンド) で手動設定できるほか、DHCPv6 クライアント機能によって動的に取得したアドレスを使用することも可能です。
- DNS リレー機能において、クライアントからの DNS リクエストを DNS サーバーに転送するときに使う始点 IPv4/IPv6 アドレスを指定できるようになりました。始点アドレスの手動設定には、`proxydns ip source`、`proxydns ipv6 source` コマンドを使います。

---


## 2.24 DHCPv6 サーバーの機能拡張

 「コマンドリファレンス」 / 「IP 付加機能」 / 「DHCPv6 サーバー」

DHCPv6 サーバーの設定において、クライアントに通知する DNS サーバーアドレスとして、自装置のインターフェース名を指定できるようになりました。これには、`dns-server` コマンド (DHCPv6 モード) に追加された `IFNAME` パラメーターを使います。これにより、RA や DHCPv6 によって IPv6 アドレスが動的に割り当てられる環境でも、配下の DHCPv6 クライアントに IPv6 上での DNS リレーサービスを提供できるようになりました。

---

## 2.25 IPsec の機能拡張


 「コマンドリファレンス」 / 「IPsec」

- Cisco 社製品との間で IPsec DPD (Dead Peer Detection) を使用できるようになりました。
- 片側の IP アドレスが不定な環境でも、トランスポートモードの IPsec を使用できるようになりました。前バージョンまで、トランスポートモードの IPsec ポリシーでは、IPsec 適用対象パケットを指定するアクセスリストで自装置と対向装置のアドレスを明示する必要があったため、アドレス不定環境ではトランスポートモードを使用できませんでした。本バージョンでは「`permit ip any any`」や「`permit ipv6 any any`」のアクセスリストを指定できるようになり、トランスポートモードの利用が可能になりました。この場合、フェーズ 2 の `local-id` と `remote-id` には「`0.0.0.0/0`」を指定してください。
- IKEv1 (ISAKMP)、IKEv2 の事前共有鍵認証で使うパスワードの長さを最大 32 文字から 55 文字に拡張しました (`auth preshared key` コマンド)。

### 3 本バージョンで仕様変更された機能

ファームウェアバージョン **5.0.3** から **5.1.0** へのバージョンアップにおいて、以下の仕様変更が行われました。


#### 3.1 ファイル名に使用できる文字

 **「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「ファイル操作」**

ファイル名に使用できる文字から、下記の文字が除外されました。本バージョンからは、各種コマンドでこれらの文字を含むファイル名を指定するとエラーになります。詳細については、コマンドリファレンス「**運用・管理**」 / 「**コマンドラインインターフェース (CLI)**」の「**使用できる文字**」をご覧ください。

- ・ アスタリスク (\* 0x2A)
- ・ カンマ (, 0x2C)
- ・ スラッシュ (/ 0x2F)
- ・ 小なり記号 (< 0x3C)
- ・ 大なり記号 (> 0x3E)
- ・ 円記号またはバックスラッシュ (¥ 0x5C)
- ・ 縦棒 (| 0x7C)

#### 3.2 DHCPv6 クライアント

 **「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」 / 「DHCPv6 クライアント」**

 **「コマンドリファレンス」 / 「運用・管理」 / 「コンフィグレーション」**

- ia-pd configure コマンドの SLA\_IF\_ID パラメーター (SLA ID + インターフェース ID) が省略可能になりました。同パラメーターの省略時は、インターフェース種別と MAC アドレスに基づき SLA ID とインターフェース ID が自動生成されます。
- DHCPv6 クライアント機能に関連する下記コマンドの書式を変更しました。

5.0.3 まで	5.1.0 から
[no] ia-pd subdelegate IFNAME dns-server	[no] subdelegate IFNAME dns-server
[no] ia-pd subdelegate IFNAME domain-name	[no] subdelegate IFNAME domain-name
[no] ia-pd subdelegate IFNAME sntp-server	[no] subdelegate IFNAME sntp-server

#### 注意事項

- ・ 本バージョンでは、スタートアップコンフィグに旧書式のコマンドが含まれている場合、新書式に自動変換された上でランニングコンフィグに反映されるため、バージョンアップ前にスタートアップコンフィグを書き換えておく必要はありませんが、スタートアップコンフィグファイル自体は自動変換されませんので、バージョンアップ後にスタートアップコンフィグを保存しなおすことをおすすめします。
- ・ ただし、スタートアップコンフィグを新書式で保存した場合、該当コンフィグを以前のバージョンでは使用できなくなりますので、本バージョンにバージョンアップするときは、backup zip コマンドなどを用いて、設定内容をバックアップしておいてください。バックアップと復元の方法は、コマンドリファレンス「**運用・管理**」 / 「**コンフィグレーション**」の「**設定内容の一括バックアップ**」をご覧ください。

### 3.3 DNS リレー

 **「コマンドリファレンス」 / 「IP 付加機能」 / 「DNS リレー」**

DNS リレー機能のキャッシュタイムアウト時間を次のとおり変更しました（最大 10 分の制限を撤廃）。

5.0.3 まで	5.1.0 から
DNS サーバーから通知された時間。 ただし、通知された時間が 10 分を超える場合は 10 分	DNS サーバーから通知された時間

## 4 本バージョンで修正された項目

ファームウェアバージョン **5.0.3** から **5.1.0** へのバージョンアップにおいて、以下の項目が修正されました。

- 4.1 リンク速度の異なるインターフェース間における双方向通信のスループットを改善しました。
- 4.2 多数の端末間における高負荷通信時のスループットを改善しました。
- 4.3 USB デバイスの接続時、まれに意図しない再起動が発生することがありましたが、これを修正しました。
- 4.4 ip domain lookup コマンドを設定していなくても自装置の DNS 問い合わせ機能が有効になっていましたが、これを修正しました。  
以前のバージョン（5.0.0～5.0.3）で自装置の DNS 問い合わせ機能を使用していた場合は、本バージョンへのバージョンアップ時に本コマンドが設定されているかどうかを確認し、設定されていない場合は追加設定してください。
- 4.5 システム異常時に障害解析用データを出力できないことがありましたが、これを修正しました。
- 4.6 copy コマンドで内蔵フラッシュメモリーから USB メモリーにファイルをコピーするとき、コピー元に指定したファイルが存在せず、なおかつ、コピー先にコピー元と同名のファイルが存在している場合、エラーとならずにコピー先のファイルを削除していましたが、これを修正しました。
- 4.7 CLI のリダイレクション機能でファイルを作成するときに、出力ファイル名として「|」や「>」を含む名前を指定できていましたが、エラーとなるよう修正しました。  
なお、本修正にともない、ファイル名に使用できる文字の仕様が変更されています。詳細は 3.1 項をご覧ください。
- 4.8 内蔵フラッシュメモリーが故障している状態でフラッシュメモリーにファイルを保存した場合、正常に保存できていないにもかかわらず書き込みエラーが表示されない場合がありますが、これを修正しました。
- 4.9 CLI ログイン用のユーザーアカウントをダイナミックに削除しても、設定を保存して再起動するまでは削除したユーザーでログイン可能でしたが、これを修正しました。



- 4.10 action ip resume-route コマンド、action ip shutdown-route コマンドで GATEWAY パラメーター（ネクストホップアドレス）を指定すると、対象トリガーのアクションが正常に実行されませんでした。これを修正しました。
- 4.11 1つのトリガーに複数のアクションを設定した場合、一部のアクションが実行されないことがありましたが、これを修正しました。
- 4.12 VRRP の SNMPv1 トラップに含まれる Generic-Trap フィールドの値が正しくありませんでしたが、これを修正しました。
- 4.13 Cisco 社製品から本製品への Telnet ログインが正常に行えないことがありましたが、これを修正しました。
- 4.14 tunnel mode コマンドを no 形式（no tunnel mode）で実行できませんでしたが、これを修正しました。
- 4.15 切断状態の PPPoE インターフェースにおいて、自動再接続（ppp auto-reconnect コマンド）の設定を無効から有効に変更しても、PPP の接続が開始されませんでした。これを修正しました。
- 4.16 KDDI（au）の USB 型データ通信端末 DATA07 使用時に電話番号の設定を間違えると USB ポートがリセットされていましたが、これを修正しました。
- 4.17 PPP インターフェースの無効化後に show mobile signal-strength コマンドを実行しても、電波強度が表示されないことがありましたが、これを修正しました。
- 4.18 PPP の接続処理中に PPP インターフェースを無効にすると、一時的にコンソールが応答しなくなることがありましたが、これを修正しました。
- 4.19 システム起動後に、KDDI（au）の USB 型データ通信端末 DATA07 を USB ポートに装着した場合、数分間 PPP 接続ができない状態になることがありましたが、これを修正しました。
- 4.20 WAN 側 Ethernet インターフェースに VLAN（LAN 側スイッチポートの VLAN 機能）の設定を行ってもエラーメッセージが出力されませんでした。これを修正しました。
- 4.21 BVI インターフェース（ブリッジグループ全体を表す仮想的なインターフェース）が存在している状態で、関連するブリッジグループを削除してもエラーになりませんでした。これを修正しました。
- 4.22 show bridge コマンドの出力に「aging-time」のスペルミスがありましたが、これを修正しました。
- 4.23 ブリッジグループに所属しているインターフェースを削除すると、コンソールが応答しなくなることがありましたが、これを修正しました。
- 4.24 宛先 MAC アドレスが自装置の MAC アドレスではない IP パケットをルーティングすることがありましたが、これを修正しました。

- 4.25 あるインターフェースに 32 ビットマスクで IP アドレスを設定している場合、該当アドレスを含むサブネットの IP アドレスを他のインターフェースに設定することができませんでしたが、これを修正しました。
- 4.26 RIP の設定において、`distribute-list`、`offset-list`、`passive-interface` の各コマンドでデフォルト VLAN (vlan 1) 以外の VLAN インターフェース (vlan 2 ~ 4085) を指定した場合、設定を保存して再起動したときに該当設定が反映されないことがありましたが、これを修正しました。
- 4.27 `ip helper-address` コマンドや `ip forward-protocol udp` コマンドの実行時に意図しないエラーメッセージが表示されることがありましたが、これを修正しました。
- 4.28 `ipv6 dhcp client-profile` コマンドにおいて、最大文字数 (32 文字) を超えるプロファイル名を指定してもエラーメッセージが出力されませんでしたでしたが、これを修正しました。
- 4.29 「`copy running-config xxx`」による設定保存時に、`ia-pd configure` コマンドの `SLA_IF_ID` パラメーターが `show running-config` で表示されるのとは異なる表記で保存されることがありましたが、これを修正しました。
- 4.30 DHCPv6 クライアント機能において、DHCPv6 Reply メッセージを受信できなかった場合に、DHCPv6 Request メッセージを再送していませんでしたが、継続して再送するよう修正しました。
- 4.31 DHCPv6 クライアント機能において、Rapid Commit (高速コミット) の要求を有効にした場合、関連プロセスが異常終了することがありましたが、これを修正しました。
- 4.32 `access-list ipv6 resequence` コマンドの CLI ヘルプに誤記がありましたが、これを修正しました。
- 4.33 DHCP サーバーがリレーエージェント経由の DHCP Discover メッセージに回答しませんでしたでしたが、これを修正しました。これにより、リレーエージェントが存在するネットワークにおいても、本製品の DHCP サーバーを利用できるようになりました。
- 4.34 複数の IPsec ピアを FQDN で指定している環境において、1 つの ISAKMP/IPsec SA が削除されると、他の ISAKMP/IPsec SA も削除されることがありましたが、これを修正しました。
- 4.35 IKEv1 (ISAKMP)、IKEv2 の事前共有鍵 (パスワード) を設定する `auth preshared key` コマンド (ISAKMP ポリシーモード) において、最大文字数を超えるパスワードを入力した後で他のコマンドモードに移動すると、IPsec 関連プロセスが異常終了することがありましたが、これを修正しました。

## 5 本バージョンでの制限事項


---

ファームウェアバージョン 5.1.0 には、以下の制限事項があります。

### 5.1 USB デバイスを接続した状態での起動


USB デバイスを接続した状態で本製品を起動した場合、起動中に意図しないメッセージが表示され、また、起動後に USB デバイス関連のログが記録されないことがあります。表示およびログ記録だけの問題であり、USB デバイスの動作には影響ありません。

### 5.2 PPP プロファイルの設定変更

 「コマンドリファレンス」 / 「PPP」


PPP プロファイルの設定を変更した場合、保存していない設定が削除されることがあります。その場合は再度設定してください。

### 5.3 LCP Configure-Request の再送間隔

 「コマンドリファレンス」 / 「PPP」

LCP Configure-Request パケットの再送間隔が lcp timeout コマンドの設定値より短くなっています。

### 5.4 BVI インターフェース

 「コマンドリファレンス」 / 「ブリッジング」

 「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「IP インターフェース」

BVI インターフェース（ブリッジンググループ全体を表す仮想的なインターフェース）では DHCP クライアント機能（ip address dhcp コマンド）を使用できません。

### 5.5 OSPF インターフェース数

 「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「経路制御 (OSPF)」

OSPF セッションを確立可能なインターフェースの数は最大 20 です。

### 5.6 BGP Hold Time

 「コマンドリファレンス」 / 「IP ルーティング」 / 「経路制御 (BGP)」

BGP の Hold Time を 0 に設定しないでください。Hold Time を 0 に設定した場合、BGP ピアが再起動などのため再接続を要求してきても、本製品がこれを拒否するため、それ以降 BGP セッションを確立できなくなります。

### 5.7 IPv6 近隣要請 (NS) パケット

 「コマンドリファレンス」 / 「IPv6 ルーティング」


システム起動直後に受信した IPv6 近隣要請 (NS) パケットを破棄することがあります。

## 6 取扱説明書の補足・誤記訂正

---

取扱説明書（613-001384 Rev.A）の補足および誤記訂正です。

### 6.1 INIT スイッチによる USB メモリーからのリストア

 **「取扱説明書」45 ページ**

INIT スイッチを使ってバックアップファイルをリストアするときは、USB メモリーにリストア対象のバックアップファイルだけを入れてください。USB メモリーに複数のバックアップファイルが保存されていると、どのファイルがリストアされるかわからないためです。

### 6.2 サポートする USB 型データ通信端末

サポートする USB 型データ通信端末につきましては、弊社ホームページでご確認ください。

## 7 取扱説明書とコマンドリファレンスについて

---

最新の取扱説明書（613-001384 Rev.A）とコマンドリファレンス（613-001491 Rev.D）は弊社ホームページに掲載されています。

本リリースノートは、上記の取扱説明書とコマンドリファレンスに対応した内容になっていますので、お手持ちの取扱説明書・コマンドリファレンスが上記のものでない場合は、弊社 Web ページで最新の情報をご覧ください。

※バージョン「613-001491 Rev.D」は、コマンドリファレンスの全ページ（左下）に入っています。

<http://www.allied-telesis.co.jp/>